

<書 評>

Chapey R 編

横山 巖・河内十郎 監訳

失語症言語治療の理論と実際

綿森淑子（東京都老人総合研究所）

本書は、現在米国の臨床失語症学の領域において優れた業績をあげている錚々たるメンバーの分担執筆による失語症言語治療学の現状の集大成である。ここ数十年來の研究の積み重ねが失語症に対する言語治療効果を明確に肯定して来ている一方、特定の治療法と回復との関係などに関するデータは乏しく、言語治療の内容は今なお個々の言語治療士の治識と技量に負う所が大きい状態にある。これは1つには近年開発された多くの新しい治療法が、利用し易い形で発表されていないことにも起因すると思える。

本書は伝統的な刺激法以外の新しいアプローチを多数含んでおり、各治療法毎にそれを提唱する著者らが体系的にその治療原理、理論の根拠や研究データを提供している点に特徴がある。集められた治療法は、理論中心で治療法としてはまだ骨組みの域を出ないものから極めて具体的

で治療効果についてのデータも示されているものまでさまざまであるが、種々の治療法が一堂に集められたことによって相互の比較・関連づけが可能となった点で編者 Chapey 博士の意図は見事に成功している。

全体は4部18章から成り、第1部（1～4章）では失語症治療に関する基礎的考察がなされ、第2部（5～11章）、第3部（12～14章）では Schuell の刺激法に始まり、思考、コミュニケーションに焦点を当てた革新的なアプローチまで10種の言語治療法が詳述されている。第4部（15～17章）では失語症に随伴する特殊な障害—聴覚的理解力の障害、失行・失認、麻痺性構音障害—に対する治療法に加え、コミュニケーションボードやサイン言語など代用手段に関する考察がまとめられ、臨床失語症学の将来に対する展望で結ばれている。本書は各章が独立した論文の形式をとっているので読者の興

味に合わせてどこから読み始めても良いが、この分野に余りなじみのない読者にはまず第1章を通読されることをおすすめする。本書の編者 Chapey 博士の手になるこの章は、失語症の言語治療の意味、その理論的根拠を極めて明快に述べるとともに、臨床失語症学の潮流をコンパクトにまとめ、さらに本書の構成を概観しているからである。

失語症の理論・臨床の諸領域にわたって大きな足跡を残した Schuell の名著「成人の失語症」以後、この分野での進歩を総括した教科書はなく、久しく渴望されていたものである。失語症の言語治療の新たな飛躍への出発点を示す画期的な本書の出版は言語治療士にとって大きな福音であると共に、失語症など高次脳機能障害の研究・臨床に携わる医師・治療士の方々にとっても貴重な情報源となろう。

次々と意欲的に失語症学の最新の書の翻訳を完成される七沢病院言語科を中心とした訳者の方々と監訳の労をとられた七沢病院院長横山巖先生、東京大学助教授河内十郎先生に感謝の意を表したい。

（B 5，頁 394，1984，¥ 12,000，創造出版 刊）